

山上憶良歌の梵志体の影響

THE INFLUENCE OF WANG FANZHI'S STYLE ON YAMANOUÉ—NO OKURA'S POEMS

山口 博*

The poems of Tao Yuaming have already been referred to as a Chinese literature that influenced Yamanoué-no Okura's poems. Every one of the poems, however, is not closely related to each other. And scholars of Chinese literature have denied their relation. On the other hand, Yamanoué-no Okura's poems have surprising similarity to those of Wang Fanzhi, who was a layman poet in the days of Sui and early Tang.

The words they have in common are:

貧窮(poverty), 金(gold), 里長(a village officer), 竈(a furnace), 石塩(halite), 楚(a rod), which are not seen in any other part of *Man'yōshū*; 死(death, appearing 46 times), 子(children, 28 times), 妻子(wife and children, 10 times), 老(old age), 病(illness).

In total they amount to 50.

Here are some of Okura's poems that have close meanings to Wang Fanzhi's:

*YAMAGUCHI Hiroshi 新潟大学教授。富山大学名誉教授。文学博士。東京都立大学大学院修了。著書に『王朝歌壇の研究』『万葉集形成の謎』『万葉の歌一人と風土—(北陸)』、論文に「中日外交より生れた万葉集」「周武と桓武と小雅<鹿鳴>」などがある。

《Presented here in the translation of Yamanoue-no Okura's poems》

1. Am I not like a refugee who takes shelter in mountains ?

<Man'yōshū 800 Prologue>

2. All the mountainous gold. Who will make use of it ?

<Jin'a-jiaimon in Man'yōshū>

3. Children are more precious than all the gold and treasure.

<Man'yōshū 803>

4. No fire at the furnace / Spider's thread in the rice cooker /
Have Forgotten to cook rice. <Man'yōshū 892>

5. What is the worth of silver and gold ? More precious treasure is ... <Man'yōshū 803>

6. Wrinkles and white hair / Body growing weaker / Not only growing old / Frequent illnesses due to my age / Worsening mornings and evenings. <Jin'a-jiaimon in Man'yōshū>

7. A dead man is less than a living rat.

<Jin'a-Jiaimon in Man'yōshū>

Similarity in diction means that their themes are alike. Wang Fazhi wrote poems about parental love, Confucianism and Buddhism, life of the poor in hunger and coldness, family precepts, lessons in life, worldly wisdom, sufferings from illness and age, wealth, death and uncertainty, to establish his own style called "Wang Fanzhi's style". And those were themes shared by Yamanoue-no Okura.

Mr. Kikuchi Hideo, who studies Chinese history, has once asserted that Yamanoue-no Okura's *Hinkyūmondōka* (Verse of the Poor) was influenced by Wang Fanzhi's 『貧窮田舎漢』 (A Poor

Countryman). But my point is that most of the poems by Yamanoue-no Okura are after Wang Fazhi's style.

山上憶良歌に影響を与えた中国文学として、陶淵明詩が指摘されています。ですが、両人の作品の多くが濃厚な関係にあるわけではありません。強くその影響の指摘されている「貧窮問答歌」と「詠貧士」との関係も、「貧」の認識の違いから、中国文学研究者側からは否定論が出されています。

それに比して、敦煌から出土した『王梵志詩集』の詩とは、用語・表現・主題等において、驚異的類似性を持っています。『王梵志詩集』という詩集は聞き慣れない名ですが、寛平3年(891)頃成立の『日本国見在書目録』別集部に「王梵志集二卷」「王梵志詩二卷」とあります。

この『王梵志詩集』の中の「貧窮田舎漢」と「貧窮問答歌」との関係は特に著しいのですが、このことを初めて指摘したのは、中国史学の菊池英夫氏です⁽¹⁾。菊池氏の論文から両作品対比の部分を引用します。「貧窮田舎漢」の訳は、菊池氏の訳したものです。下線は山口が引きました。

「貧窮問答歌」

風雑じり 雨降る夜の 雨雑じり
雪降る夜は 術もなく 寒くしあれ
ば 堅塩を 取りつづしろひ 糟湯
酒 うち啜ろひて 咳かひ 鼻びし
びしに しかとあらぬ 鬚かき撫で
て 我を措きて 人は在らじと 誇
ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き
被り 布肩衣 有りのことごと 服
襲へども 寒き夜すらを 我よりも
貧しき人の 父母は 飢ゑ寒からむ

「貧窮田舎漢」

貧窮田舎漢 菴子極孤栖 両共前生
種 今世作夫妻 婦即客春擣 夫即
客扶犁 黄昏到家裏 無米復無柴
男女空餓肚 状似一食齋 里正追庸
調 村頭共相催 幞頭巾子露 衫破
肚皮開 体上無禪袴 足下復無鞋
醜婦来悪罵 啾唧擲頭灰 里正被脚
蹴 村頭被拳搓 駢将見明府 打背
趁廻来 租調無処出 還須里政倍
門前見債主 入戸見貧妻 舍漏兒啼

妻子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ こ
の時は 如何にしつつか 汝が世は
渡る 天地は 広しといへど 吾が
為は 狭くやなりぬる 日月は 明
しといへど 吾が為は 照りや給は
ぬ 人皆か 吾のみや 然る わく
らばに 人とはあるを 人並みに
吾も作れるを 綿もなき 布肩衣の
海松の如 わわけさがれる 襤褸の
み 肩にうち懸け 伏廬の 曲廬の
内に 直土に 藁解き敷きて 父母
は 枕の方に 妻子どもは 足の方
に 囲み居て 憂へ吟ひ 籠には
火気ふき立てず 甑には 蜘蛛の巢
懸きて 飯炊く 事も忘れて 鶴鳥
の 呻吟ひ居るに いとのかて 短
き物を 端截ると 云へるが如く
楚取る 里長が声は 寝屋戸まで
来立ち呼ばひぬ かくばかり 術無
きものか 世間の道

哭 重重逢苦災 如此更窮漢 村々
一両枚
食いつめの田舎もの、庵にどん底の
わび住まい。二人は前世の因縁で、
此の世でめおとになったけど、妻は
やとわれ米つきに、夫もやとわれ犁
をひく。たそがれ家に帰りつきゃ、
米もなければ薪もない。子らは餓え
てるすきっ肚、まるで断食行のよう。
里正は庸調取り立てに、村頭も共に
催促に、頭巾も頭がむき出して、単
衣は破れて肚が出る。ズボンもなけ
れば鞋もない。かかあは悪態ついて
きて、白髪をむしってかきくどく。
里正にゃ蹴とばされ、村頭にゃなぐ
られる。県に駈け込み訴えに行きや、
かえってどやされ逃げ帰る。もしも
租調が集らにゃ、里正も弁償させら
れる。門口見れば取り立て人、家に入
れば貧女房、子らの泣き声小屋を
漏れ、重ね重ねの苦しさよ。これよ
りもっとひどいのが、どの村村にも
一、二組。

両作品の類似を整理しますと、次のようになります。各項目「貧窮問答歌」
「貧窮田舎漢」の順で挙げました。

住居 { 伏廬の 曲廬の内に
 { 菴子極孤栖

- 食 事 { 竈には 火氣ふき立てず 甌には 蜘蛛の巢懸きて 飯炊く事
も忘れて
無米復無柴
- 飢 餓 { 父母は 飢ゑ寒からむ
男女空餓肚
- 衣 類 { 綿もなき 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 襤褸のみ肩
にうち懸け
幘頭巾子露 衫破肚皮開 体上無禪袴 足下復無鞋
- 徴 税 { 楚取る 里長が声は 寝屋戸まで 来立ち呼びひぬ
里正追庸調 村頭共相催 里正被脚蹴 村頭被拳搥
駟將見明府 打背趁廻来 租調無処出 還須里正陪 門前見債主
- 泣 声 { 妻子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ
舍漏児啼哭
- 極 貧 { 我よりも 貧しき人の
如此更窮漢 村々一両枚
- 世界観 { かくばかり 術無きものか 世間の道
重重逢苦災

驚くほどの類似で、菊池氏が「貧窮田舎漢」の直接影響により「貧窮問答歌」ができたとするのも、尤もかと思われます。

しかし、私が半信半疑であったのは、王梵志詩なるものは『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局）にも『全唐詩』（同）にもなく、菊池氏の提出した「貧窮田舎漢」しか私は分からず、他の作品の検討ができなかったからです。

ところが最近、中国で『王梵志詩集』及び研究書⁽²⁾を入手、それを見て私は衝撃を受けました。「貧窮問答歌」だけではなく、憶良歌の殆どが、語句・表現・主題内容において『王梵志詩集』の詩との類似が認められるからです。

先ず憶良歌と王梵志詩との共通語句ですが、万葉歌には憶良歌にしか見られない貧窮・金・里長・竈・石塩・楚・死・子・妻子・老・病など、50数語が王

梵志詩と共通しています。王梵志詩には、死が46例、子が28例、妻子が10例も使われていることは注目してよいでしょう。主なものを挙げます。左は憶良の作品、右は張錫厚氏『王梵志詩校輯』の詩全体から拾った語句です。

悼亡文	詩	空・二鼠・四蛇・苦海・煩惱・波浪
800	序	侍養・妻子・父母
802	題・序・歌	子・衆生・世間
803	歌	金・宝・子
804	題・序・歌	世間・世間難住・百年・皴・杖・老
886	序・歌	疾・泡沫・老・親・二親・世間
892	歌	貧窮・寒・糟湯酒（白酒）堅塩（石塩）咳（喘） 鼻びしびし（鼻涕垂）布肩衣（褐裙）貧人・飢寒・ 妻子・哭泣・日月・不照・竈・楚（鞭）里長・世 間・業報
沈痾文		修善・三宝・懺悔・疾・罪過・老・病・驢・鬼・ 医方・飲食・長生・生・死・金・富・生・鼠・賢 愚・有尽身（有限身）・道人・丹經
俗道	序・詩	五戒・殺生・偷盜・邪淫・妄語・黄泉・長夜・金 ・大虚
897	題・歌	老・病・子・世間・死・哭泣
904	歌	宝（宝物・万宝）・白玉・子・父母・世間

王梵志詩の語句を見ただけでも、憶良歌を推量することができます。

次には類似句の主な例を挙げます。傍線は憶良の作品で、王梵志詩の番号は張錫厚氏『王梵志詩校輯』によります。※は菊池氏が既に指摘したものです。

- { 知敬父母忘於侍養（800序）
- { 備孝我亦孝、不絶孝門戸、……生時不供養、死後祭泥土。（043）
- { 亡命山沢之民（800序）
- { 天下浮逃人（278）

- { 何処より 来りしものぞ (802)
- { 人子何処出 (023)
- { 銀も 金も玉も 何せむに 勝れる宝 子に及かめやも (803)
- { 父子相憐愛、千金不肯博 (138)
- { 黄金未是宝 (182)
- { 金玉不成宝 (292)
- { 難遂易尽、百年賞楽。(804序)
- { 朝夕乞暫時、百年誰肯保。(289)
- { 蝮の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 面の上に
- { 何処ゆか 皺が来たりし 手束杖 腰にたがねて (804)
- { 面皺黒髪白、把杖入長道。眼中冷下、病多好事少。(289)
- { 白髪随年生、美貌別今夕。(292)
- { 仮合之身 (887序)
- { 一身無本利、四大聚会同。(081)
- { 常知らぬ 道の長手を くれくれと 如何にか行かむ (888)
- { 死者帰長路 (053)
- { 還湊入杳冥 (077)
- ※ { 術もなく 寒くしあれば (892)
- { 衣破忍飢寒、廻独一身活。(259)
- ※ { 糟湯酒 うち啜ろひて (892)
- { 麦酒三五瓶、時々独飲楽。(263)
- ※ { 咳かひ 鼻びしびしに (892)
- { 眼中双涙流、鼻滴垂入口、……引气喘急。(268)
- ※ { 麻衾 引き被り (892)
- { 家貧無好衣、造得一襖子。中心襖破氈、還将布作裏。……夜眠還作被。
(064)
- { 妻即無褐裙、夫体無禪袴。(266)

- ※ { 日月は 明しといへど 吾が為は 照りや給はぬ (892)
 { 日月甚寛恩、不照五逆鬼。(038)
 { 世間日月明、皎皎照衆生。……貧富有殊別、(058)
- ※ { 我よりも 貧しき人の 父母は 飢ゑ寒からむ (892)
 { 貧窮実可憐、飢寒肚露地。(056)
 { 無米復無柴、男女空餓肚。(270)
- ※ { 天地は 広しといへど 吾が為は 狭くやなりぬる (892)
 { 世間無処坐 (047)
- { 人皆か 吾のみや然る (892)
 { 世間何物平 (062)
 { 何処有公平 (290)
 { 但行平等心 (304)
- { 綿も無き 布肩衣の 海松の如 わわけさがれる 襤褸のみ 肩にう
 { ち懸け (892)
 { 窮苦無煩惱、草衣随体着。(006)
 { 例着一草衫 (037)
- { 伏庵の 曲庵の内に 直土に 藁解き敷きて (892)
 { 草舎原無牀、無氈復無被。(037)
 { 草屋足風塵、床無破氈臥。……地鋪藁薦臥。(148)
- { 竈には 火気ふき立てず 甑には 蜘蛛の巢懸きて 飯炊く 事も忘
 { れて (892)
 { 常住無貯積、家人受寒肌。衆厨空安竈、粗飯当房安 (024)
 { 渾家少糧食、尋常空餓肚。男女一処坐、恰似餓狼虎。(266)
- { 我犯何罪 (沈痾自哀文)
 { 前身有何罪 (119)

{ 死人不及生鼠 (沈痾自哀文)
死王羨活鼠 (115)

{ 鬢髮斑白、筋力尪羸。不但年老、復加斯病。……老疾相催、朝夕侵動
(沈痾自哀文)
身体骨崖崖、面皮千道皺。行時頭即低。策杖与人語。眼中雙淚流、鼻涕垂入口。腰似斷弦弓、引氣瘦喘急。口裏無牙齒、(268)
面皺黑髮白、把杖入長道。眼中冷下、病多好事少。(289)
白髮隨年生、美貌別今夕 (292)

{ 一日絕氣、積金如山、誰為富哉 (沈痾自哀文)
積金作宝山、氣絕誰將用。(034)
宝物積如山、死得一棺木。(011)

{ 飲食禁忌之厚訓 (沈痾自哀文)
飲酒妨生計 (190)
飲酒是癡報、如人落糞坑。(231)
造酒罪甚重、酒肉俱不輕。(232)

{ 生必有死。死若不欲不如不生。(悲嘆俗道偈合即離易去難留詩)
有生即有死、何後復何先。(088)
古來皆有死、何必得如生。(096)
有生皆有滅、有始皆有終。(099)

{ 年長く 病みし渡れば 月累ね 憂へ吟ひ ことことは 死ななと思へど (897)
術も無く 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど (899)
生時苦痛、不如早死好。(005)

{ 富人の 家の児共の 着る身なみ 腐し棄つらむ 絹綿らはも (900)
儷富披錦袍 (006)

{ 横風の にふぶかに 覆ひ来ぬれば (904)
 { 横遭狂风吹、総即連根倒。(069)

以上のように語句が共通し、類似表現が多ければ、表現されている思想も共通してきます。『王梵志詩集』にうかがわれる思想は、虚無観念・絶望的思想・懐疑的態度・兵士困苦・飢寒貧窮生活・父子愛・家庭和睦・官吏廉明・無争思想と、仏教（因果応報・人生無常・生即是苦・生老病死・行善止悪・早求涅槃・厭世楽死・因果応報・自我解脱・五戒）儒教（忠孝・仁義）道教（忍辱・服弱・保身・謙讓・不争）などです。これらのうち幾つかは、憶良の思想ですし、憶良歌の仏教思想の出典は『涅槃経』などに求められています。従って、憶良歌の仏教思想はほとんど王梵志詩に求めることができますし、仏教思想が文学になるということを実証していることも共通しています。儒仏道三教の混在は、これこそ憶良思想の特色です。

その思想を表現するための主題を見ると、次の諸点において共通します。

1 貧窮凝視

憶良 「貧窮問答歌」

王梵志 「貧窮田舎漢」(270) 「家中漸漸貧」(039)

2 貧民逃亡

憶良 「令反惑情歌」

王梵志 「天下浮逃人」(278)

3 掌中珠

憶良 「思子等歌」「和為熊凝述其志歌」「老身重病經年辛苦及思兒等歌」「恋男子名古日歌」（白玉の我が子古日）

王梵志 父母生兒身、衣食養兒徳。(252)

父母憐男女、保愛掌中珠。(271)

4 老醜無慙

憶良 「哀世間難住歌」(804)

女 { 若 少女らが 少女さびすと 唐玉を 手本に纏かし
 同輩児らと 手携はりて 遊びけむ 時の盛り
 老 蝮の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ
 紅の面の上に 何処ゆか 皺が来りし (一は云
 はく、常なりし 笑まひ眉引き 咲く花の 移ろ
 ひにけり)

男 { 若 大夫の 男子さびすと 劔太刀 腰に取り佩き
 獵弓を 手握り持ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き
 はひ乗りて 遊び歩きし…………… 少女らが さ寝
 す板戸を 押し開き い辿りよりて 真玉手の
 玉手さし交へ さ寝し夜の
 若 手束杖 腰にたがねて か行けば 人には厭はえ
 かく行けば 人に憎まえ 老男は かくのみなら
 し

王梵志 知識相伴侶、暫時不覺老。面皺黒髪白、把杖入長道。眼中
 冷涙下、病氣多好時少。冤家烏枯眼、無眠天難曉。朝夕乞
 暫時、百年誰肯保。使者門前喚、手脚婆羅草。(289)

5 早求涅槃

憶良 月累ね 憂へ吟ひ ことことは 死ななと思へど (897)
 術もなく 苦しくあれば 出で走り 去ななと思へど

(899)

王梵志 生時有害痛、不如早死好。(005)

6 立身

憶良 士やも 空しくあるべき 万代に 語り継ぐべき 名は立
 てずして (978)

王梵志 立身行孝道、省事莫為愆。(165)

以上のように見てきますと、憶良の作品が『王梵志詩集』の詩の影響を受けていることは、一応確かのように思われてきます。

ところが、菊池説に対する反論が出されました。木簡研究者の東野治之氏です⁽³⁾。東野氏は「父母生兒身」(292)の中の詩句「西征吐蕃賊」を挙げて、このように吐蕃の脅威を名指して表現できるのは、安史の乱以後9世紀半ばの状況だから、憶良より後の詩の可能性があると、[右の詩一つをみても中唐以降の時勢をふまえた可能性が濃く、無条件に初唐の作品とするには疑問があると考える。このような無理を犯して、あえて憶良の述作の糧を『王梵志詩集』に求める必要はないというべきであろう」と言うのです。

それなら、『王梵志詩集』の詩はすべてが中唐以降の作品かと言うと、そうとも言い切れない要素があります。例えば、「佐史非台補」(026)の詩ですが、この初句は「佐史は台の補する職ではない」の意です。「台」と言うのは、尚書省が中台・文昌台などと改称されたことがあります、それを言うのです。改称されていた時期は、高宗から武則天に至る間、662年-669年(中台)、684年-695年(文昌台・中台)、703年-704年(中台)で、つまり初唐です。憶良の渡唐していた702年から707年までは、中台と呼ばれた最後に引っ掛かっています。この詩の作者は、憶良と同時代の人である可能性もあるわけです。

又、「奉使親監鑄」(075)に「開通万里達、元宝出青黄」と言う句がありますが、「開通元宝」は621年に高祖が鑄造させた開元通宝のことです。666年には高宗が乾封泉宝を鑄造させていますから、開元通宝を歌う075詩は、666年以前の作品と言えましょう。

いったい、王梵志という詩人の生存年代は何時と考えられているのでしょうか。胡適・鄭振鐸・任二北・趙和平・張錫厚・朱鳳玉など中国台湾の研究者は、ほとんどが隋末から初唐の人物としています。それに比して、内田泉之助・菊池英夫・小沼勝衛・入矢義高・矢吹慶輝など日本側研究者では、初唐説は少数派であり、多くは盛唐、中唐説です。

先程の「台」「開通元宝」などや、王梵志についての外部諸資料から見ます

と、確かに隋末初唐説は生まれてくるのですが、しかし、東野氏の主張も無視できません。これはどうしたことでしょうか。

実は『王梵志詩集』と呼んできましたが、そういう名の完全な詩集が敦煌から発掘されたわけではないのです。「王梵志詩集」と原巻に記載された4種類15本の詩巻と、無名詩集だけれども、用語・表現・内容が「王梵志詩集」と記載ある詩巻の詩と似ているので、その残巻と判断された詩巻とを合わせて、『王梵志詩集』と呼ばれているのです。

「台」「開通元宝」の詩は「王梵志詩集巻中」と原巻にある詩巻ですが、「西征吐蕃賊」や「貧窮田舎漢」は無名詩巻にあるのです。この無名詩巻のある詩、張錫厚氏のテキストでいうと、「前死未長別」(256)ですが、これが北周の詩人釈亡名の「五盛陰詩」であることも、朱鳳玉氏により指摘されています。

このように考えると、隋末から初唐の詩人王梵志の詩を集めた『王梵志詩集』は確かに存在するのですが、無名詩巻までをそこに含めるには、慎重を要するのではないのでしょうか。「王梵志集」と記載のある詩巻の最古の写本は、レニングラード・アジア諸民族研究所蔵オルデンブルグ本で、大暦6年(771)書写ですから、今の問題には参考になりません。

北周の釈亡名だけでなく、六朝から隋・唐・宋にかけて、王梵志の詩と類似の主題・思想・表現・語句を持った詩の流れがあったようです。白話詩といわれている詩がそれです。王績・元稹・白楽天・王維・寒山・拾得・顧況・羅隱・杜荀鶴などの詩人が挙げられます。王維の『王右丞集』の中の人生無常詩には「梵志体」と注があります。張氏は敦煌発見の無名詩23首を「梵志体禪詩」の名で参考として挙げていますが、この梵志体の流れを尊重したらどうでしょうか。憶良の作品は、梵志体の影響を著しく受けたと言わなければならない。もちろん、その流れの中には、隋初唐の詩人王梵志その人の作品もあるわけですが。

注

- (1) 山上憶良「貧窮問答歌」と王梵志「貧窮田舎漢」の関係を論じた菊池英夫氏の論文「唐代敦煌社会の外貌」(『講座敦煌3 敦煌の社会』大東出版社・昭和55年刊)「王梵志詩集と山上憶良貧窮問答歌」(第31回国際アジア北アフリカ人文科学会議論文・昭和58年)。未見。
「山上憶良と敦煌遺書」(『国文学 万葉集いま何が問題か』学燈社・昭和58年5月号)
- (2) 張錫厚『王梵志詩校輯』中華書局 1983年(昭和58年)刊
朱鳳玉『王梵志詩研究』上・下 台湾学生書局 1984年(昭和59)・1985年(昭和60)刊
張錫厚輯『王梵志詩研究彙録』上海古籍出版社 1990年(平成2年)
- (3) 「上代文学と敦煌文献―道経・字書・『王梵志詩集』をめぐって―」(『万葉集研究』第15集・塙書房・昭和62年)

討議要旨

名古屋大学の山下宏明氏より「従来貧窮問答歌は、リアリズムの側から取られえていたが、英文学者川崎利彦氏は牧歌としてとらえ、またその発言をふまえて、高木市之助氏がひとつの考えを発表しておられる。その点をどうお考えか」という質問があり、発表者は川崎・高木の考えに近いと答えられた。小西甚一氏より、特定の人の影響を受けたのではなく、梵志体という一つのスタイルを考えられたところに賛意が表された。